

国立大学附属幼稚園の役割について考える

— 教育課程を編成する過程から —

山崎 晃／玉城 史英

本研究では教育課程に係る研究内容について明らかにすること、各園の状況が取組内容などにどのような差異があるのかを明らかにすることにした。それによって、どのようなプロセスをたどって教育課程の研究が進展していくのか、どのような要因が関わっているかを明らかにした。その結果、取組状況の自己評定が遅れている群、進んでいる群、その両方の中間群では、報告書に掲載された内容が異なることが明らかになった。遅れている群では指導計画や連携が多く、中間群では教諭、視点、活動、改訂等が多く、進んでいる群では資質・能力、幼小、カリキュラムが特徴的な語として多かった。また、実際の記述内容と対応させて考察した結果、遅れている群では教育課程や個別の教育支援計画の作成や見直しを行っていること、交流や連携を進めていることの記述がみられた。中間群では事前事後の話合い・議論をとおして活動を見直したり、遊びから学習への継続を図ったり、計画の見直しや改訂を図ることを行っていることに関連する記述がみられた。進んでいるでは幼小や幼小中までの長期の見通しに基づく「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基本とする資質・能力の育成とそれに関わる教育課程、指導、特に、将来に向けた幼小中一貫教育を視野に入れた、長期的視点に立った活動を展開することが記されていた。このような結果は、教育課程の研究にプロセスを示唆するものであり、どのような方向で研究を進めるか日手の示唆を与えるものであった。

問題と目的

人格形成の基礎を培う幼児期の教育は重要なものであり、質の高い幼児教育の提供が期待されて（文部科学省、2011）、文部科学省からの委託事業として教育の教育課題に対応した指導方法等の研究が行われている（文部科学省、2023）。例えば、2023年度は文部科学省による幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究として、非認知能力に関する保育・幼児教育施設の意識や取り組みと園児への影響に関する調査研究（東京大学）、位置測位システムを活用した幼児理解の深化と根拠に基づくカリキュラム・マネジメントによる実践の

充実方法に関する調査研究（神戸大学）、幼児教育を担う教員に求められる資質・能力を高める研修モデルの開発（三重大学）、特別な配慮を必要とする幼児への指導の充実に関する調査研究（全日本私立幼稚園幼児教育研究機構、2021）などがある。

国立大学附属学校は、国立学校設置法施行規則に、「附属学校は、その附属学校が附属する国立大学又は学部における児童、生徒又は幼児の教育又は保育に関する研究に協力し、及び当該国立大学又は学部の計画に従い学生の教育実習の実施に当たるものとする」と規定され（第27条）、そのもとで運営されている。近年、こ



の附属学校の役割の変化を求める動きがいくつかある。「国立大学附属学校の新たな活用方策等について」(文部科学省、2009)においては、新たな活用方策として、外国人子弟等の積極的受入れによる教育の在り方の調査研究、理数教育など優先的な教育課題に応じた先導的な指導方法等の開発、学校の組織のマネジメント・人材育成の調査研究、異学校種間の接続教育や一貫教育の調査研究、特別支援教育への寄与、児童生徒の勤労観、職業観を育てるためのキャリア教育の推進、があげられている。このことに対応するための方策として、以下のような項目が挙げられている。

1. 附属学校の存在意義の明確化：①「国の拠点校」・・・大学・学部を持つ人的資源を活用しつつ、公立学校で実施するものとは異なる先導的・実験的な取り組みを中長期的視点から実施する。②「地域のモデル校」・・・地域の教育界との連携協力の下に、地域の教育のモデル校として、地域の教員の資質・能力の向上、教育活動の推進に寄与する。
2. 組織運営上の改善：①学内マネジメント体制の確立(附属学校運営会議(仮称)の設置)、②地域に開かれた運営体制(地域運営協議会(仮称)の設置、公立学校との人事交流に関する基本方針の策定)
3. 業務運営上の改善：①「国の拠点校」としての育成(研究開発学校制度等の活用、文部科学省(初等中等教育局)等との連携、附属学校の全国共同利用化、「理数教育支援センター(仮称)」との連携)、②「地域のモデル校」としての育成(地域の教育委員会との連携、現職教員の研修カリキュラムの開発、附属学校の免許更新講習の場としての

活用)、③全国規模の研究協議会の開催による地域を越えた普及・啓発。

これを背景として、『附属学校における教育研究活動の上での「大学との有機的な結合」、先駆的で実験的な「国の拠点校」、成果をリードする「地域のモデル校」、等々への新たな脱皮が求められている。それは、研究開発、教育実践、そして教育実習の、更に高度で、革新的な在り方への追求と一体となるものである。』(日本教育大学協会附属学校委員会、2009. p.1)という議論がなされた。

国立大学法人のうち大学附属幼稚園(以下、附属幼稚園)として、49園が設置されている。国立大学附属学校の使命や役割として、実験的で先導的な学校教育への取り組み、教育実習の実施、大学や学部における教育に関する研究への協力などが上げられている(全国附属学校連盟、2024)。附属幼稚園には、幼児の興味・関心や発達段階に基づいた教育課程の編成、指導法の開発、そして幼児教育の質を評価・向上させる取り組みなどが求められる。また、大学の附属幼稚園として大学・学部と連携して、これらの目標を達成するための研究、研究成果の普及のために公開保育や研修会やセミナーの開催も要請されている。

実際に、このような状況の中、附属学校における研究動向の実態を捉えた研究が行われている(武田ほか、2014)。それによれば、こどもの情意面を重んじ、能動性を働かせる活動を基軸とした授業・保育の在り方を前提として、幼稚園では自発的な行為の把握、他者との交流場面による相互作用が重視され、子どもが主体的に活動する姿を的確に捉え、それに基づいた環境構成や対応が多くみられたという。さらに、附属幼稚園を対象とした研究として、プログラミング活動のメリット、期待、そして、既存の遊びとの整合性について検討する必要性や幼児



の「遊び」や「ものづくり」を大切にした活動との整合性を考慮することが重要であるとする研究（橋本、2021）、幼児教育の質の向上に貢献するための教育課程の見直し、教育課程の具体化、成果発信、質の高い実践、幼児教育の質をエビデンスに基づいて評価する研究が要請されていることを指摘した研究（大友、2021）、幼小の連続性を考慮したアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを同時に編成し、実践し、修正する重要性を指摘した研究（間瀬田、2021）、インクルーシブ教育保育を実現する基盤は、幼児と保育者の多様性の尊重、保育者間の自由な対話がなされることが重要であることを指摘した研究（柴垣ほか、2021）、「気になる子ども」社会的スキル特性に基づく支援に関する研究などが（野中ほか、2018）行われている。

また、大学や附属幼稚園が現場の保育の改善にどのように寄与することができるかの実践報告、附属幼稚園のあり方、大学・附属・現場の三者の「協同」を探求する研究会の役割や発信モデルの提案、議論（無藤ほか、2006；2007）など、多様な側面からの研究が行われている。

ところで、保育所・幼稚園・認定こども園と小学校の接続に関する研究として、多くの研究が行われている。例えば、幼小接続カリキュラムやの動向や課題について（福元、2014）、保幼小連携体制作りの在り方について検討した（一前・秋田、2012）、接続期カリキュラムの編成に係る幼小間の連携の重要性について（杉山、2016）、幼小連携の取組みの実質化を図るために学習会や研修などを行い、子どもの特性の理解、発達の方向などについて、幼小の相互理解を図っていく必要性を指摘している（山口、2015）研究がある。

そこで、本研究を開始するにあたって、実際

に附属幼稚園ではどのような研究等が行われているかを捉えるために、令和4年度全国国立大学附属幼稚園研究テーマ一覧に掲載されたテーマについてクラスター分析を実施した。その結果、7つのクラスターが見いだされた。附属幼稚園では(1)学びの環境構成、(2)カリキュラム研究・開発、(3)育内容や保育の質、(4)発達の捉え・評価、(5)未来を拓く学校、(6)教育課程の編成、(7)カリキュラムマネジメントが研究の主要な柱であることが明らかになった。この中から、本研究では幼児教育の中心となる(6)教育課程の編成を取り上げることとした。

附属幼稚園に求められている主要な役割の一つは教育課程である。附属幼稚園はその役割から日常保育の質の向上を図りながら、地域のモデルとなる保育実践や教育課程の編成、研修会の開催等の役割を果たしている。園を取り巻く環境はそれぞれに異なっており、取り組みの内容や進捗状況には差が生じることは当然のことである。そこで、本研究では教育課程に係る編成の内容が進捗状況によってどのように異なるかを明らかにすることを目的とした。それによって、どのようなプロセスをたどって教育課程の研究が進展していくのか、どのような要因が関わっているのかなどの情報を捉えることができるようになる。

方法

全国国立大学法人附属幼稚園の接続期教育過程に関する調査報告書（宮城教育大学附属幼稚園、2021。以下、2020 報告書と記述する。）に記載された内容を対象とした。2020 報告書は、小学校教育との接続に関する「(ア) 教育課程の編成」「(イ) 指導方法」「(ウ) 小学校との共有」の工夫について、教育活動の実機的な事例を収集して整理し、成果報告書にまとめたものである。本研究では (ア) 教育課程編成を



分析対象とした。

(ア) から (ウ) の記載されている内容の表記の揺れを減らして分析するために、報告書を丁寧に読み込み、幼小連携に関する先行研究の記述内容を参考にしてコーディングルールを作成した。具体的には、カリキュラム、園、学び、教育課程、資質・能力の育成、情報共有、評価指標、附属学校園、目指す、遊び、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿、幼小交流、幼小連携・接続、指導計画、改訂、接続期、協働、方法、生かす、連携、過程、生活、であった。予備的分析の結果、カリキュラム、指導計画、改訂、接続期、協働、方法、生かす、連携、過程、生活をコーディングルールとして採用した。

小学校教育との接続に関して、各園の進捗状況を各園が行った自園の評定値をもとに、三つの段階に分け、遅れている群、中間群、進んでいる群と命名した。以下、分析は群を独立変数、

(ア) 教育課程編成の記述内容記述を従属変数とした。

主な分析には、KH Coder (3b04a) によるテキストマイニング (樋口、2020) 及び、アドインソフト「文錦」(株式会社 SCREEN アドバンスシステムソリューションズ) を用いた。

結果と考察

(1) 進捗状況の評定による群分け

連携から接続へのステップ1からステップ5のどの段階にあるのかについての各園の評定値に基づいて、1.0～2.0の範囲の園を「遅れている群」(17園)、2.0～3.0の範囲の園を「中間群」(20園)、3.1～5.0の範囲の園を「進んでいる群」(11園)に分けた。

(2) 進捗状況に基づいた群による特徴語の傾向

進捗状況の判断において、遅れている群、中間群、進んでいる群にみられる特徴語を捉えた結果〔表1〕、3群間に進捗状況による違いがみられ、遅れている群では指導計画、連携、行う、作成、交流、検討など、現状の把握などの語が、中間群では幼稚園、育つ、学び、教育課程、改訂など、教育課程の改訂などPDCAに関連した語が、進んでいる群では幼小中の異校種が協同でカリキュラムなど、広い視野から発展させる報告に関連した語などが特徴語であった。

次に、群と特徴語との間にどのような関係がみられるかを検討するために、群を独立変数として対応分析を行った。その結果、特徴的でないコードとして「教育課程」、「姿」があり、遅

表1 進捗状況による特徴語

遅れている		中間		進んでいる	
指導計画	.462	教諭	.460	幼小	.385
連携	.368	生かす	.440	カリキュラム	.333
計画	.364	幼稚園	.415	協同	.333
行う	.351	育つ	.410	様々	.333
作成	.351	教育課程	.400	生活	.321
期	.325	生活	.394	過程	.308
終わる	.324	姿	.375	接続	.300
交流	.320	終わる	.368	方法	.286
教育	.313	学び	.367	実践	.280
検討	.286	改訂	.364	資質・能力	.278



表 2 進捗状況によるコーディング項目の残差分析 (χ^2 検定)

	カリキュラム	学び	指導計画	改訂	接続期	協同	方法	生かす	連携	過程	生活	ケース数
遅れている	▽ 17.65%	▽ 29.41%	▲ 70.59%	▽ 11.76%	5.88%	▽ 5.88%	11.76%	▽ 17.65%	▲ 41.18%	▽ 0.00%	▽ 11.76%	17
中間	50.00%	65.00%	▽ 25.00%	▲ 45.00%	10.00%	15.00%	5.00%	▲ 55.00%	10.00%	10.00%	30.00%	20
進んでいる	▲ 81.82%	63.64%	36.36%	18.18%	▲ 36.36%	▲ 54.55%	▲ 36.36%	18.18%	▽ 0.00%	▲ 36.36%	▲ 54.55%	11
合計	22	25	21	13	7	10	7	16	9	6	14	48
カイ2乗値	11.317 **	5.427 †	8.077 *	5.712 †	5.560 †	0.297 **	5.772 †	7.244 *	9.156 **	8.270 *	5.928 †	
有意確率	0.003	0.066	0.018	0.057	0.062	0.006	0.056	0.027	0.010	0.016	0.052	
効果量	0.486	0.336	0.410	0.345	0.340	0.463	0.347	0.388	0.437	0.415	0.351	
フィッシャーの 正確検定	0.004	0.071	0.021	0.087	0.093	0.010	0.078	0.032	0.012	0.014	0.058	
自由度	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	

れている群に特徴的なコードとして、連携、指導計画、中間群に特徴的なコードとして改訂、生かす、進んでいる群に特徴的なコードとして過程、協同、接続期、資質・能力の育成がみられた。

(3) クロス集計による群とコーディング項目の傾向把握

群によって項目の違いがみられるかを明らかにするために、 χ^2 検定・残差分析を行った結果、カリキュラム、指導計画、協同、生かす、連携、過程については、群間に有意差がみられ ($p < .05$)、学び、改訂、接続期、方法、生活については有意な傾向 ($p < .07$) がみられた (表 2)。残差分析を行った結果、以下の括弧内に示したように、カリキュラム (遅れている群 < 進んでいる群)、指導計画 (遅れている群 > 中間群)、協同 (遅れている群 < 進んでいる群)、生かす (遅れている群 < 中間群)、連携 (遅れている群 > 進んでいる群)、過程 (遅れている群 < 進んでいる群) であった。また、有意差傾向がみられた学び (遅れている群 < 中間群・進んでいる群)、改訂 (遅れている群 < 中間群)、接続期 (遅れている群 < 進んでいる群)、方法 (遅れている群 = 中間群 < 進んでいる群)、生活 (遅れている群 < 進んでいる群) であった。

指導計画と連携については、遅れている群が他の 2 群の両方あるいはいずれかの群よりも頻度が高く、残りの項目については、中間群と進んでいる群の両方あるいはいずれかの群の頻度が遅れている群よりも高かった。この結果は、幼小連携を図るためのステップを示している。すなわち、初期段階では、連携や指導計画が中心的なキーワードとして取り上げられていたことを示すものである。資料に記録された具体的な内容については (4) で取り上げる。

(4) 群とコーディング項目との関係

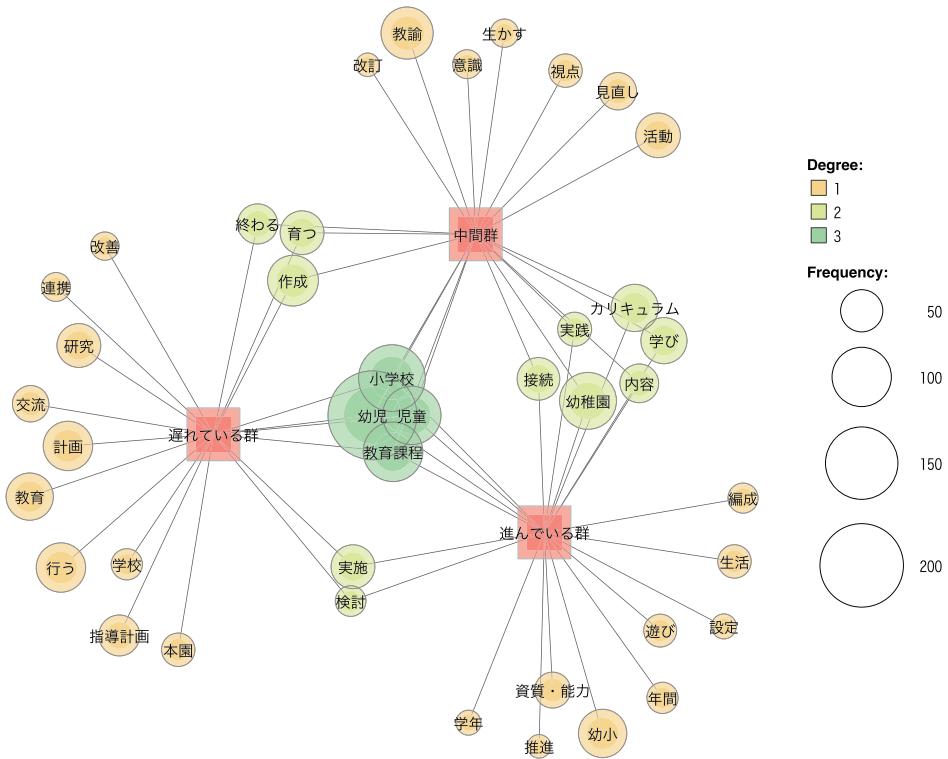
KHcoder による対応分析により、遅れている群・中間群・進んでいる群とコーディング項目の関係を明らかにした。その結果、遅れている群には指導計画や連携が、中間群には学び、育つが、進んでいる群には接続期、協同、過程、資質・能力が付置されており、予想されたように結果はほぼコーディング項目に関する χ^2 検定・残差分析の結果と対応していた。

(5) 進捗状況による群の語の特徴

進捗状況により抽出語との関係に違いがみられるかを明らかにするために、KHcoder による進捗状況を独立変数とした共起ネットワーク分析を実施した (図 1 参照)。その結果、まず、3 群に共通する抽出語は、教育課程、幼児、児



図1 進捗状況を独立変数とした共起ネットワーク



童、小学校であった。また、遅れている群と中間群に共通する抽出語は、育つ、終わる、作成であり、幼児期の終わりまでに育ててほしい姿に関連したものであった。中間群と進んでいる群に共通する語はカリキュラム、接続、実践、学び、幼稚園、内容であり、幼稚園と小学校の接続カリキュラムやその内容に関連したものであった。

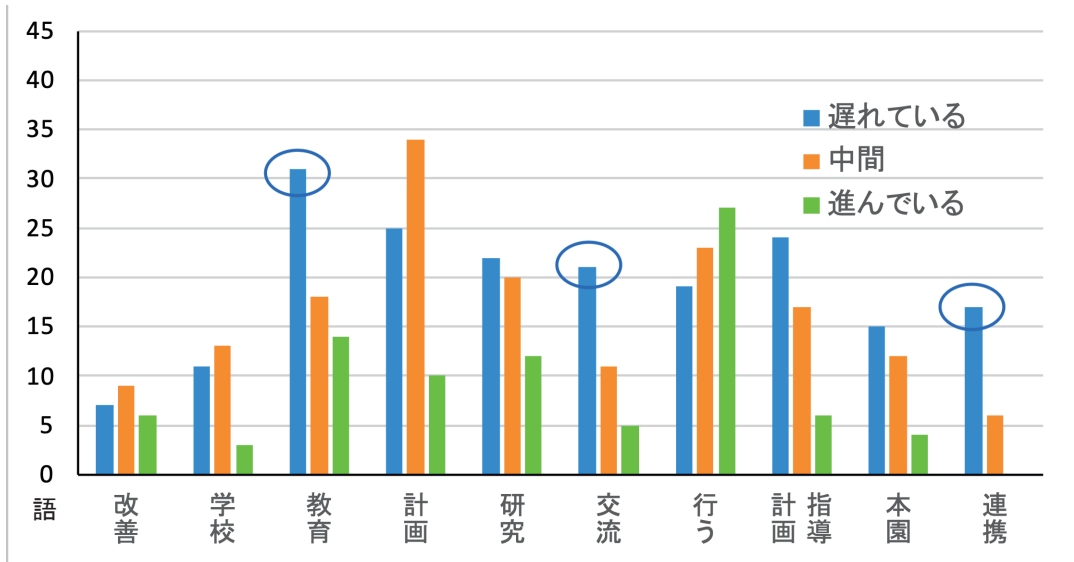
次に、遅れている群、中間群、進んでいる群のそれぞれの群において強く関連する抽出語は以下のとおりである。遅れている群では、研究、計画、教育、指導計画など研究の開始など抽出語がみられ、どのように接続していくかの計画を模索し、PDCAのPDに注力しているようである。中間群では、活動、見直し、視点、教諭、改訂など、教育課程編成の際の基礎となる抽出

語がみられ、教諭が自園教育課程を見直し、改訂するなど注力しているようである。進んでいる群では、幼小、資質・能力、推進、編成、遊びなど、教育課程の枠組みの修正や今後の展開に関する語がみられ、特徴的な語として見いだされ、PDCAのCAに注力しているようである。

さらに、抽出語の出現数が進捗の度合いによって異なるか否か、異なるとすればどのように異なるのかを明らかにする。抽出語に進捗状況による違いがみられた場合、その抽出語が特徴的であると考えられる。そこで、進捗状況に分けて、具体的にどのような文脈で抽出語が記述されているかを確認し、どのようなプロセスをたどって研究が進むかを明らかにする。



図2 遅れている群の特徴としてあがった語数



【遅れている群】

進捗状況が遅れている群に独自のものとしてあがった抽出語を含む記述において、遅れている群、中間群、進んでいる群毎にどの程度記述されていたかを示した(図2参照)。その結果、教育、交流、連携の記述数については、遅れている群と分類された幼稚園の数が多かった。実際に、どのような記述がなされているかを示し、特徴を明らかにする。

教育に関連した記述として、「保護者の子育て相談などニーズに合わせて対応している。また保護者の同意のもと個別の教育計画・支援計画を作成し、全教職員の共通理解のもと支援にあたっている。」「幼稚園教育課程を作成するに当たり、幼稚園3年間の教育課程が小学校へ接続することを意識し、幼児の実態から育てたい幼児・児童像に必要な資質・能力が育まれるように、知・徳・体のバランスのとれた教育課程を作成した。」「昨年度の幼稚園教育要領の全面実施を機会に、教育課程の見直しを随時行っている。」などの記述であった。その特徴は、教育課程や個別の教育支援計画の作成や見

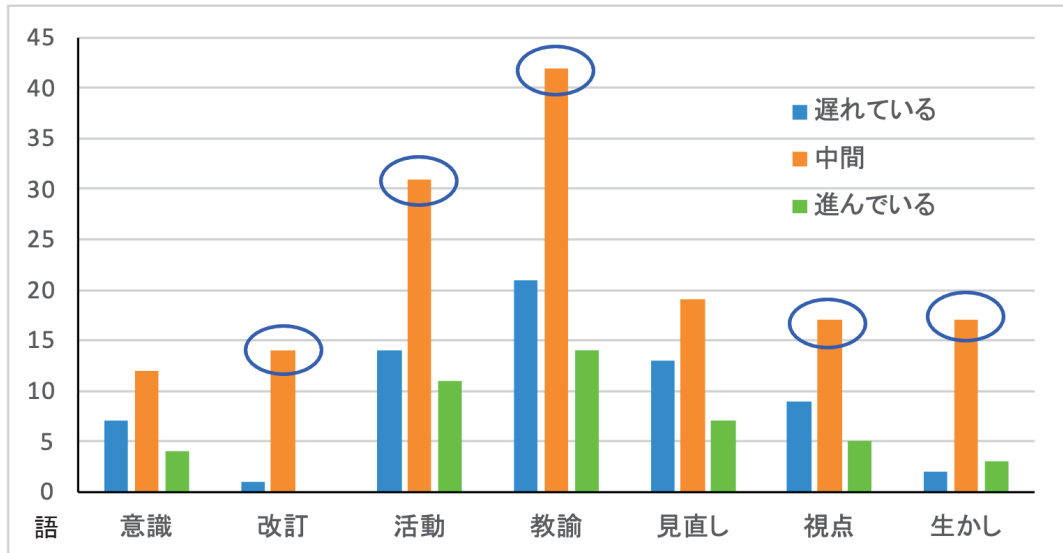
直しに関連する記述である。

交流に関連した記述として、「幼児と児童の交流活動計画の作成。」、「幼児と児童の交流活動の計画と実施について、年長児の後半の月間指導計画内のねらいに対する・・・毎年、前年度の交流活動の課題を踏まえながら、小学校教諭と(幼稚園)教諭と・・・活動を行う時期と活動の内容について綿密な打ち合わせを行うようにしている。」、「毎年、年長教諭と1年生教諭が、その年の連携計画を話し合い、それによって交流を進めている。」などの記述がみられた。特徴は、幼児と児童の交流活動の実施やその準備に関する記述である。

連携に関連した記述として、「特別支援コーディネーターとの連携」、「毎年、年長教諭と1年生教諭が、その年の連携計画を話し合い、それによって交流を進めている。幼小連携は大切であるが、決して双方の負担につながらないように留意して進めている。」など、特別支援コーディネーターや小学校との連携の実施と改善を図ることに関する記述がみられた。特徴は、教育課程や個別の教育計画の作成や支援の実態、



図3 中間群の特徴としてあがった語数



そのための打合せなどの実情が記されていることである。

【中間群】

進捗状況が中間群に独自のものとしてあがった抽出語を含む記述において、遅れている群、中間群、進んでいる群毎にどの程度記述されていたかを示した(図3参照)。改訂、活動、教諭、視点、生かしが高い頻度であった。改訂の項目に関連する記述は、「幼児と児童の交流活動計画の作成と実施、改訂」、「スタートカリキュラム実施と改訂」、「年度始めに年間の交流活動計画を作成し、活動実施前に事前打ち合わせを行い、教諭の動きや幼小それぞれのねらい、教諭の援助について確認してから活動に取り組んでいる」、「活動後は振り返りの時間を設け、幼児・児童の姿の共有や活動内容についての反省等を行い、改訂し次年度に生かしていくようにしている。」などの記述であった。特徴は、年間の交流活動計画の作成、実施、改訂を繰り返すPDCAサイクルに関する記述であった。

活動の項目に関連する記述は、「幼児と児童

との交流活動計画の作成」、「幼稚園の活動で扱った教材等について、小学校と情報を共有している」、「小学校入学に向けての不安や入学後の過度な緊張を和らげる活動を取り入れている」、「『幼児の・・・遊びや活動における学びが、小学校の教科における学習につながった実践事例を踏まえ、幼児の「経験の履歴」と児童の「単元の内容」のつながりを探っていく。』などの、活動計画の作成、情報共有に関連する記述であった。特徴は、幼稚園での遊びや活動による学びを小学校での学習に継続させる工夫や発展的展開が図られていることであった。

教諭の項目に関連する記述は、『・・・幼小の円滑な接続につながる交流活動にするために、幼稚園の年長児担任教諭と1年生担任教諭が、計画の見直し、「時期」「回数」「内容」の検討を行っている』、「・・・1年生教諭と幼稚園教諭で、昨年度までのカリキュラムの確認及び接続期における援助・指導について共通理解を図る」、「交流活動計画の作成・実施・改訂・・・の実施に当たっては、各回に、事前の計画(P)、実施(D)、事後の反省・改善(CA)を年長組



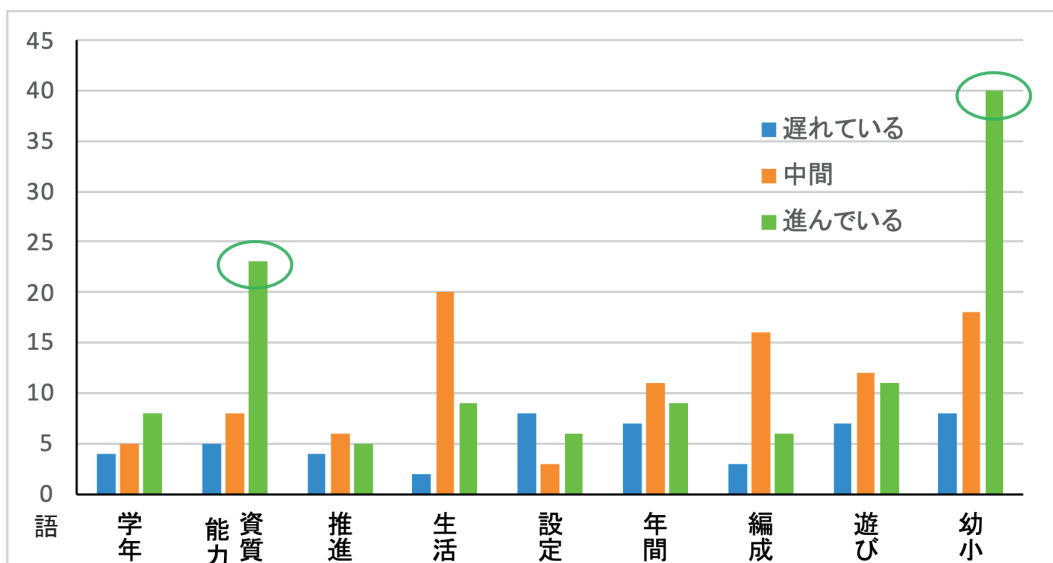
教諭団、1年生教諭団で行っている。」「保育の意図を十分に語り合い共有するために園長・学年教諭との週案研修会を実施している。」などである。特徴は、教育課程や交流活動計画や週案の作成などについて、幼稚園と小学校の担任教諭が中心となって、接続や連携、指導などについて共通理解し、見直しなどの活動が記されていることであった。

視点の項目に関連する記述は、『幼児の育ちの姿を「・・幼児が夢中になって遊ぶ姿の中でどのように「じぶん」「ひと」「もの」に向き合っているかを実践事例から読み取る。」』『「主体性を育むための評価指標」を特別支援学校と幼稚園から高等学校まで5つの視点（日常的行動に関する資質・能力、問題（課題）解決能力、価値の形成に関する資質・能力、協働組織の形成に関する資質・能力、公共意識に関する資質・能力）で作成し、教育の接続を大切にしている。』、「月1回、幼小中全教諭による共通目標実現のための視点や一貫カリキュラムの編成について協議したり、研修を重ねたりしている。」、「評価もチームで行い、幼児の行動の

意味や背景の理解を多様な視点で行い・・・」、「交流活動の後、幼児、児童共に互恵性のある学びができていたかを視점에評価することを試みている。」など、どのような点に焦点を当て、協議したり、研修したりしているかに関する記述であった。特徴は、幼児の発達や研究主題の評価指標、実践や指導の改善のための多様な評価を可能にする活動が記されていることであった。

生かすの項目に関連する記述は、「評価も・・・次の育ちにつながるような実践や指導の改善に生かしている。」、「情報交換ではカリキュラム実施後の成果と課題について共有し、改訂及び次年度のカリキュラム作成に生かすことができるようにしている。」、「幼稚園と小学校が互いの実践に生かしていくために具体的な事例の提示などをするなど、より分かりやすくなるよう工夫し、検討してきている。」、「活動後は振り返りの時間を設け、幼児・児童の姿の共有や活動内容についての反省等を行い、改訂し次年度に生かしていくようにしている。」、「実施後は活動を振り返り、反省を行い、次年度の活動計

図4 進んでいる群の特徴としてあがった語数





画の見直しに生かしている。」など、指導の実践や活動についてのどのような機会にどのように次年度に向けて活用するかに関する記述であった。特徴は、幼児の実態や行動・活動の理解、カリキュラムの評価のために情報を共有し、次年度以降の活動計画、教育課程の見直しにつながる取組みについての活動が記されていることであった。

【進んでいる群】

進捗状況が進んでいる群に独自のものとしてあがった抽出語を含む記述において、遅れている群、中間群、進んでいる群毎にどの程度記述されていたかを示した（図2参照）。資質・能力と幼小の項目が高い頻度であった（図4参照）。資質・能力の項目に関連して、「幼稚園3年間の教育課程が小学校へ接続することを意識し、幼児の実態から育てたい幼児・児童像に必要な資質・能力が育まれるように、知・徳・体のバランスのとれた教育課程を作成した。」「『主体性を育むための評価指標』を特別支援学校と幼稚園から高等学校まで5つの視点（日常的行動に関する資質・能力、問題（課題）解決能力、価値の形成に関する資質・能力、協働組織の形成に関する資質・能力、公共意識に関する資質・能力）で作成し、教育の接続を大切にしている。』」「『本園の従来の教育課程・・・を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を踏まえ、資質・能力の三つの柱との関連・・・幼児の実態に照らし合わせ・・・『幼児期に育みたい資質・能力と教育課程』として改訂を試み・・・』」「『日々の保育の中で、幼児・児童たちの遊びを、「3つの資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点で学びを見取り、その学びを「キーワード」で表し分析シートにまとめている。』など、資質・能力の育成に関する記述がみられた。特徴

は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基本とする資質・能力の育成とそれに関わる教育課程での位置付けであった。

幼小の項目に関連して幼稚園の資料には、「幼小の交流活動について「時期」「内容」等を確認する話し合いをもっている。」「教諭の動きや幼小それぞれのねらい、教諭の援助について確認してから活動に取り組んでいる。」「『附属学校園として幼小中一貫教育の継続性によるメリットを最大限生かすことにより成果を上げるため、・・・「12年教育」による取組の方向性を基に・・・取組の具体化のための方針と手立ての目安を明らかにした。・・・幼小連携の具体的な取組を行う上で、それぞれの教育課程上の位置付けやねらい等についてすり合わせるために幼小連携推進委員会を設け、「12年教育」による取組の柱と具体化の方針を受けて、幼稚園と小学校教育の接続について、重点を置く取組や配慮すべき事項を押さえている。また、これまで継続してきた交流活動について修正及び改正案について議論し、改善を図っている。』」「幼小の円滑な接続につながる交流活動」「幼小接続カリキュラムの見直しと実践」など、幼小（中）間のカリキュラムの確認及び接続期における援助・指導について共通理解を図るなど、計画、実践し、検証、見直しなどに関する記述であった。特徴は、これまでに取り組んできたカリキュラム、教育課程を理解しなおし、検証し、見直しを行うこと、さらに、将来に向けた幼小中一貫教育を視野に入れた、長期的視点に立った活動を展開することが記されていることである。

まとめ

教育課程の編成においては、「育成を目指す資質・能力を明らかにした上で、未来の姿から逆算して、現在の学年・教科・単元等でどのよ



うな指導を行うべきかという長期的な視点で行うことが重要」(文部科学省、2021)である。教育課程を編成する際には、バックキャストイングの考え方を取り入れ、教育目標を明確にし、教育課程の編成方針を家庭や地域とも共有することも必要である。一般的な教育課程編成の手順は、(1)関係法令や幼児の発達過程を理解し、社会の要請や保護者の願い等を把握する、(2)幼稚園の教育目標を共通理解し、目指す子ども像を明確にする、(3)教育目標と幼児の発達及び発達過程を理解する、(4)幼児の発達の実態とその時期にふさわしい生活が展開されるよう適切なねらいと教育内容、活動時間等を設定する、(5)子どもの発達や活動内容等に基づいた教育課程の評価、改訂・修正、そして実施である。

本研究では、「国立大学附属学校の新たな活用方策等について」(文部科学省、2009)の①「国の拠点校」としての先導的・実験的な取り組みを中長期的視点から実施する、②「地域のモデル校」としての地域の教員の資質・能力の向上、教育活動の推進に寄与することについて、附属幼稚園はどのように応えているのかを検討した。その結果、附属幼稚園が長期的視点から発達していく方向についても意識しながら長期計画・教育課程の見直しを行っている園がある。また、幼小接続推進会議、行事・授業等の交流活動、研究集会・教職大学院での議論に参加している附属幼稚園がある。しかし、このような取り組みをしている園の数はそれほど多くない現状があり、今後、附属幼稚園の役割をよりニーズに応えられる方向に導く広げるヒントとなる。

教育課程編成のプロセスについて、表1から連携や指導計画の作成、交流の計画などの段階から、連携や幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を視点とした学びを幼小の教諭の関わりによって改善していく段階、そして幼小が

協同して接続カリキュラムを編成し、実践する段階に変化していることがうかがえる。表2に示したように、遅れている園の特徴は指導計画や連携などであり、中間群の園の特徴は教育課程の改訂や幼小間で成果と課題を共有し、次年度の作成に生かすなどであり、進んでいる群の園は生活、カリキュラム、協同、接続期、過程、方法であった。また、図1に示したように、遅れている群では、研究の開始に関わる抽出語が、中間群では教育課程編成の際の基礎となる抽出語が、進んでいる群では、具体的に何を組み込むかに関わる抽出語が示され、教育課程編成のプロセスを示唆していた。これは本研究の目的である教育課程編成のプロセスを明らかにすることにつながる。すなわち、まず、子どもの発達や特性と園の目標と関連などを考慮して教育課程、指導計画を作成し、次に、作成した教育課程、指導計画を子どもの活動・発達などの多方面のエビデンスをもとに評価し、改訂する、さらに、幼児から児童期にわたる長期的な見通しや枠組を熟考し、不断に幼小間の情報共有、意思疎通を図るシステムを構築し、教育課程と実践との往還を図るプロセスが想定されることになる。

本研究においては、教育課程編成が具体的にどのようなステップで進むかについては十分に明らかにすることはできなかったことので今後の検討課題としたい。さらに2021報告書(宮城教育大学、2021)には「(ア)教育課程の編成」「(イ)指導方法」「(ウ)小学校との共有」の工夫について記載してある。このうち(イ)と(ウ)については検討していない。2021報告書が(ア)(イ)(ウ)から構成されていることから、本研究はその一部を取り上げて分析し考察したに過ぎない。したがって、本研究の結果は幼小接続期の教育課程の一部から議論したことになる。(ア)、(イ)、(ウ)を全体として



捉えた研究が必要である。

本研究結果から、接続期の教育課程編成にはステップがあり、進捗状況に園による違いがみられた。しかし、園を取り巻く環境は多様であり、各園の特性がその進捗に影響を及ぼしている面があることは考慮しておく必要がある。また、どの園においても、子どもたちの未来を想定しながら、教育課程を編成し、日々の教育・保育に携わっていることは言うまでもない。

【引用文献】

福元真由美 (2014) 「幼小接続カリキュラムの動向と課題-教育政策における2つのアプローチ-」 教育学研究、81、pp.396-407.

橋本忠和 (2021) 幼児教育でプログラミング活動を実施する課題点についての一考察-国立大学法人附属幼稚園と北海道内幼児教育施設へのアンケートの分析を通して- 北海道教育大学紀要 (教育科学編)、72、577-592.

一前春子・秋田喜代美 (2012) 人口規模の観点からみた地方自治体の保幼小連携体制作り 国際幼児教育研究、20、97-110.

間瀬田恵美・福島裕子・鎌田麻里・三藤三穂子・甲斐かおり・湯地敏史 (2021) 幼小連携における接続期カリキュラムの設計 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要、29、107-116.

宮城教育大学 (2019) 幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図る教育過程や指導方法の工夫の在り方についての研究 令和元年度又部科学省委託「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」

文部科学省 (2009) 国立大学附属学校の新たな活用方策等について

文部科学省初等中等教育局教育課程課 (2021) 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関

する参考資料

文部科学省初等中等教育局教育課程課 (2023) 幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究 (https://www.mext.go.jp/a_menu/youchien/1405077_00007.htm) (2024/1/10 採録)

無藤隆・森下葉子・齋藤久美子・高濱裕子 (2007) 保育者の研修に対して大学と附属が寄与するあり方をめぐって-幼児教育未来研究会の実践から考える- お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要、4、35-44.

無藤隆・岩立京子・西坂小百合・高濱裕子 (2006) 大学と附属幼稚園と現場の関係を構築する幼児教育未来研究会の試みを通して お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要、3、45-53.

日本教育大学協会附属学校委員会 (2009) 大学・学部の附属学校園における改革の現状と問題点-今後の展望に関する調査報告書-

野中陽一朗・谷脇のぞみ・矢田崇洋・岡谷里香・都築郁子・森下英恵・大西美玲・峯智子・土井原崇浩・野角孝一・玉瀬友美・吉岡一洋 (2018) 「気になる子ども」を対象とした保育実践に関する一考察-幼児用社会的スキル尺度・保育者評定版の結果を参照しながら- 高知大学教育実践研究、32、53-60.

大友秀明 (2021) 幼稚園教育の重要性 埼玉大学社会科教育研究会 埼玉社会科教育研究、27、1-3.

大野眞男・今野日出晴・千葉紅子・渡邊奈穂子 (2020) 幼小の学びをつなぐ接続期カリキュラムの作成に向けて 岩手大学教育実践研究論文集、7、63-68.

柴垣登・千葉紅子 (2021) 幼稚園におけるインクルーシブ教育についての考察-国立大学附属幼稚園の保育実践に着目して 岩手大



- 学大学院教育学研究科研究年報、5、221－234.
- 杉山直子（2016） 接続期カリキュラム：幼児教育から小学校教育へ 広島都市学園大学子ども教育学部紀要、3、33-42.
- 武田信吾・土井康作・鈴木慎一郎（2014） 国立大学附属学校の研究動向に関する実態調査—研究紀要の分析に基づいて— 地域学論集、13、39-49.
- 山口美和（2015） 幼保小連携における「接続期カリキュラム」の意義と課題 長野県短期大学紀要、70、155-167.
- 全国附属学校連盟（2024） <https://www.zenfuren.org/zenfuren/zenfuren-198/>（2024/1/23 採録）
- 国立大学附属幼稚園からの提案（2022） 質の高い幼児期の教育（2022）令和4年度全国国立大学附属幼稚園研究テーマ一覧（令和4年2月現在）
- 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構（2022） 特別な配慮を必要とする幼児への指導の充実に関する調査研究—特別支援学校、医療や福祉、保健等の業務を行う関係機関との連携について

謝 辞

本研究にあたり、宮城教育大学（2019）の幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図る教育過程や指導方法の工夫の在り方についての研究令和元年度又部科学省委託「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」を分析させていただいた。記して感謝申し上げます。



Thinking about the Role of Kindergartens Attached to National Universities - From the Process of Organizing the Curriculum -

Akira Yamazaki

Fumie Tamaki

In this study, we decided to clarify the content of research related to the curriculum and how the situation of each kindergarten differs in the content of initiatives. As a result, we clarified the process that is followed to advance research on the curriculum and the factors that are involved. As a result, it became clear that the content of the report differed between the group that was lagging behind in self-evaluation of the status of initiatives, the group that was progressing, and the intermediate group of both. In the lagging group, there were many teaching plans and collaborations, in the intermediate group, there were many teachers, perspectives, activities, revisions, etc., and in the advanced group, qualities and abilities, early childhood, and curriculum were the most characteristic words. In addition, as a result of considering the correspondence with the actual descriptions, it was found that the lagging group was preparing and reviewing the curriculum and individual educational support plans, and that they were promoting exchanges and collaborations. In the middle group, there were descriptions related to reviewing activities through pre- and post-discussion discussions, continuing from play to learning, and reviewing and revising plans. In the advanced section, it was stated that the development of qualities and abilities based on the “ideal state of growth by the end of early childhood” based on a long-term outlook for kindergarten and elementary and junior high school, and related educational curricula and guidance, especially activities from a long-term perspective with a view to integrated education for the future, are developed. These results suggest a process for the study of the curriculum and provide suggestions for the direction in which the research should proceed.